
(令和6年9月12日掲載)

交差するまなざしの中で



.....

戸田 ひかる (とだ・ひかる)

映画監督。ロンドン大学大学院で映像人類学を学ぶ。「愛と法」(2017)で第30回東京国際映画祭日本映画スプラッシュ部門賞、第42回香港国際映画祭最優秀ドキュメンタリー賞などを受賞。監督・プロデュースした、Netflix「マイ・ラブ 6つの愛の物語」の日本編は2021年4月から190カ国で配信中。

.....

監督したドキュメンタリー映画の主人公、石山春平さんと妻の絹子さんと出会ったのは2019年の春、ハンセン病家族訴訟の判決が出る数カ月前だった。

絹子さんの明るい声に引き入れられ、春平さんが療養所時代に独学した写真を見せてもらいながら話を聞いた。温かい視線を互いに向けながら話す二人は、毎日を大切にされていると感じた。それは、絹子さんが書きためた「生活記録」と呼ばれる短歌や、きれいに書き表された独自のカレンダーからも伝わった。一時もこぼさないように大切に記録された日々のかげらが、西日の差し込むこぢんまりとした部屋にあふれていた。その空間と共に二人の「今」を残したいと思った。

裁判では、90年近く続いた強制隔離政策により、患者や家族に対する偏見差別を助長した国の責任が問われた。結果は、560人以上の家族から成る原告側の勝利。判決は「無らい県運動」で患者を社会から追放した市民の加害性にも言及した。撮影を進めながら、ハンセン病は決して過去のことでなく今もなお、あらゆる差別が存在する現代社会を作り出す私たち一人一人の責任が問われていることに気づいた。

春平さんは、コロナ禍前は各地を飛び回り自身の経験を語っていた。優しく先生が自分の病気が分かると2度と来るなど怒鳴り、机が燃やされ小学校を追放されたこと。療養所に入るまで5年間、実家の納屋で一人隠れて暮らしたこと。釣りをしていると川が汚れると石を投げられ、あんまり石を投げられたもんだから「石山」なんだ、と時折笑いを交えながら自らのつらい過去を、聴く人の記憶に刻んでいった。

特殊な顔だから俺のことが嫌な人は寄ってこないよ、と笑う春平さん。次の瞬間には、いまだに病気のことを隠している仲間がほとんどだと言う。二人も春平さんの病気について話せない時期が長かった。葛藤を経てカメラの前に立つ二人の姿は、今もなお家族にさえ病歴を隠さなければいけない人々や、匿名でしか裁判の原告になれない人々、全国の療養所で故郷に帰れぬまま亡くなっていった方たちの存在も物語っている。彼らが自分たちを守ろうとしているのは、私たち一人一人が向ける厳しいまなざしからだ。

10カ月にわたり二人の生活を記録させていただいた。当たり前だが、ハンセン病は二人の生活の一部であり全てではない。映し出されるのは、互いに寄り添いながら淡々と日々を生きる二人の姿。その姿から過去の苦難は見えない。しかしカメラは残酷で、優しい表情がこぼるほんの一瞬も捉えてしまう。編集でそういう瞬間を見るたび、記録されることに対する覚悟とそれに至るまでの語りきれぬ道のりを想像する。

世界には今も私たちの視線から逃れた場所で苦しんでいる人々がいる。目を背けたくなる厳しい現状のガザ、米兵による新たな性加害が発覚した沖縄、軍事政権による民間人への弾圧と暴力が続くミャンマーに対し、私たちが傍観者でいられるのも、自分たちのまなざしの可能性や責任に気づいていないからではないか。気づきながらも見て見ぬふりはしていないか。

私たちは、自分たちの内なる差別意識を直視し、それらを利用し恐怖心をあおる権力者を見張らなければいけない。再び加害者にならぬように。春平さんと絹子さんの温かいまなざしに私たちに託された思いを感じ取りながら、どのような未来を見据えるのか。私たち一人一人にかかっている。